

令和6年度

第2回丹後「子育て」サポート協議会の概要

- 1 日時 令和6年8月25日(日) 14:30~17:30
- 2 場所 京都府立海と星の見える丘公園 セミナーハウス内研修室
- 3 出席者 **丹後「子育て」サポート協議会顧問**
杉岡秀紀(福知山公立大学地域経営学部准教授)
丹後「子育て」サポート協議会委員3名
多々納智(京都府宮津天橋高等学校 教諭)
野木俊宏(京都府海と星の見える丘公園 園長)
稲本朱珠(与謝野町高校魅力化コーディネーター)
各市町教育委員会担当者
事務局(丹後教育局)
- 4 協議「丹後で『子育て』サポートに関わる協働を生むためのメッセージについて」
 - (1) 「子育て」サポート環境を創る大人の在り方・考え方を言葉にする。
 - ア 事務局から
 - ① 発信する対象を子どもの近くで接するPTA(親・教師)とする。
 - ② 令和5年度協議からの3つのキーワード「大人の枠を外し」「対話」「許容・度量」と第1回協議内容、委員それぞれの実践をもとに今後、「子育て」をサポートする環境づくりにおいて大切にしていきたいことを検討する。
 - イ 委員から
 - ① 体験活動に親子で参加するとなれば、感動の共有・共感を仕組む実践を考える。活動前の保護者と価値観・目的の共有をしておくことが重要である。
 - ② 子どもと大人が関わる様々な活動において、同じ課題に対して、子どもと大人それぞれの立場での学びがあることに意義がある。
 - ③ 子どもが自ら成長しようとするなら、親も子どもの成長を支えようと学び、育つと考えられる。「子育て」は「親育ち」でもある。
 - ④ 子どもに関わる活動の際に、大人同士がその目的・意図を共有しながら、子どもと大人も目的・意図を共有する。それが「子どもと同じ目線で」「大人と対等に子どもを見る」といった表現へとつながるのではないか。
 - ⑤ 丹後の子どもを育てているという意識が大人に必要なではないか。
 - ⑥ 大人は、子どもに丹後でより多くの体験活動ができる環境や体制を整備することが大切である。まずは体験活動の質より量を求める方がよいのではないか。
 - ⑦ 様々な事情で、子どもに自然体験活動等をさせてやれない保護者への配慮も必要である。
 - ⑧ 丹後の子どもに様々な体験活動の機会を保障するために市町教育委員会の理解と支援が必要になる場合も考えられる。

- ⑨ イベントや行事などの特別な体験活動以外に、子どもの日常的な体験を地域の力で保障し、地域に委ねられる環境をつくる視点も忘れてはならない。
- ⑩ 地域の社会教育の場では、大人が子どもから学ぶ取組がある。大人も子どもと一緒に「学び合い、育ち合う」ことが「自然にできる」という「自然」と、フィールドとしての「自然」の両方があるのが丹後の強みだと感じる。
- ⑪ 「子育て」というワードに魅力がある。(例「子育て」ではなく「子育て」していますか?)
- ⑫ 大人は、子どもの内発的動機から生まれる発言に耳を傾けながら、子どもに「巻き込まれる」ことが求められる。
- ⑬ 「巻き込まれる」という表現の他に、行動を共にして支えるという意味での「伴走」という表現も「子育て」に関わる大人の在り方として大切ではないか。
- ⑭ 「伴走」とは単に寄り添うということではなく、「共に走る」ということである。

キーワード

「子育て」「大人も子どもと一緒に」「自然(に)」「学び合い・育ち合い」
「(子どもの活動に)巻き込まれる」「伴走」

5 指導助言(杉岡顧問)

(1) 本協議会の方向性

- ・「子育て」サポート協議会は「親育ち」の観点を意識したものになる。高等学校のPTA役員の中には、役員を続けたいと考える方がいる。親が活動の中で、学び貢献する意欲を高めて成長している。
- ・「学びは、生涯続くもの」という学習観を認識し、大人が学び続ける実践をする。
- ・大人が子どもの活動にちゃんと巻き込まれ、必要な判断は子どもに委ねることもできる。それを丹後では18歳までの大人の関わりで考える実践をしていく。高校生が地域創生に関わる取組に参画する等、「丹後の18の魂、100歳まで」と言える土台が丹後地域にあると言える。それは丹後の強みである。

(2) 仕掛け・スローガンについて

- ・例:「子育て、親育ち、町育ちができる丹後!」
- ・島根県海士町の「ないものがない」、福知山市庵我地区の「あんがいいいあんが」など短く印象に残るものを意識する。
- ・丹後に必要な教育を再定義「リフレーミング」することによって、どのように言語化するか検討し、本協議会が発信するメッセージを創り上げる。

